

ハサミムシの不名誉な俗称 (Vulgar dialect names of earwigs used in Kansai Region, Japan)

高田 兼太¹⁾

Abstract: In this report on the field of cultural entomology, dialect names for earwigs in Kansai region were recorded as to “*Chinpo-Basami*” and “*Chinpo-Kiri*”, which are thought to indicate “cock (“*Chinpo*” is a slung word indicating penis) cutter” or possibly “cock-shaped cutter”. Such vulgar dialect names of earwigs in Kansai Region may be derived from their cerci on their abdomen and their possible occurrence around lavatory or urinating place of the past used in Kansai Region, Japan. Henceforth, we will need to investigate (1) when this dialect words occurred, (2) whether this dialect words are still used and (3) where this dialect words has been used in Kansai region or Japan (because it is possible that this dialect words has been used out of Kansai region).

昆虫は地球上のありとあらゆる環境に存在するが、その多様な昆虫は人にとって身近な存在であり、様々なかたちで人々とかかわりをもっている。それ故に、昆虫は世界中の様々な文化事象に表象しているが(例えば、Berenbaum, 1995; 小西, 2007; Meyer-Rochow et al. 2008, Klein, 2012; 高田, 2010; 高田, 2013), このような文化事象にかかわる昆虫の影響について調べる学問を文化昆虫学という(Hogue, 1987; 三橋, 2000; 小西, 2003; 小西, 2007; 高田, 2010; 高田, 2013)。文化昆虫学においては、芸術や文学、漫画など幅広い文化事象が研究対象とされるが、昆虫がかかわる言葉、とりわけ昆虫の方言に関連することもまた文化昆虫学の研究課題としてとりあつかうことができる(Hogue, 1987)。

日本には地域ごとに多様な方言が存在し(佐々木,

2011)、特定の生き物の名前にも地域によってさまざまな呼び方がある。もちろん、それは昆虫についても例外ではなく、それぞれの種によって様々な方言が存在している(加納, 1993; 斎藤, 1993; 斎藤, 1996)。昆虫の方言には、その意味を直接に理解できなくなっているものも多いが(加納, 1993)、昆虫に対して人々が持つイメージ、あるいは昆虫と人々との接し方や接する状況など文化的な背景が多かれ少なかれ反映されていると考えられる(たとえば、Hogue, 1987; 加納, 1993; 斎藤, 1993; 斎藤, 1996)。たとえば、ショウリョウバッタは地域によっては「はたおりばった」と呼ばれるが、その由来は二本の後ろ肢をつかんでバッタの脛節と腿節の間を屈曲運動させることにより、ぎこちない体の往復運動をさせて機織りに見立てる虫遊びにちなむとされる(斎藤, 1996)。そのようなことから、人間と昆虫との



図1 「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」ことハサミムシ A: ハマベハサミムシ *Anisolabis maritima* のオス個体 B: イソハサミムシ *Anisolabis seirokui* のメス個体

¹⁾ Kenta TAKADA 大阪市西淀川区

関係性を考える上で、方言を記載し論考することには文化昆虫学的な観点から意義があるといえる。一方で、このような多様な昆虫の方言は、マスメディアの発達や社会のグローバル化の進行による標準語の浸透、および理科・自然科学教育・啓蒙の促進による標準和名の普及とともに失われていくことが予想されるため、なるべく早急に調査を進める必要がある。本報文では、関西地方におけるハサミムシの方言（俗称）について記録し、若干の考察を試みるとともに今後の課題について述べたいと思う。なお、このテーマをとりあげた理由は、関西地方におけるハサミムシの俗称が意外性に富み、大変ユニークであることによる。というのも、関西におけるハサミムシを指す方言はとても下品でかつハサミムシにとって不名誉なものなのである。

ハサミムシは、ハサミムシ目 (Dermaptera) の昆虫の総称あるいは一般名称であり、通常尾端に可動する角質の鋏を持っており、これがその名前の由来になっている。このハサミムシの角質の鋏は、海外でもその名前の由来になっているようで、少なくとも英語圏では Pincerbug のように尾部の鋏にちなんだ俗称が多く存在するようである (Berenbaum, 2007)。このように人々にその鋏が特徴と認識されるハサミムシであるが、そのようなハサミムシに対して、関西では「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」という、一般名称と同じくその鋏に由来すると考えられながらも、なんとも下品でユニークな俗称がある (図 1)。私は、2009 年ごろにハサミムシに対して興味を持ち始め、採集・飼育するようになったのであるが、父親 (昭和 20 年代生まれ) に採集したハマベハサミムシを自慢げに見せたときに、幸運にも父親からその名前を教えてもらう機会に恵まれた。また、他の方との交流を通じて、関西でハサミムシが「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」と呼ばれている (もしくは呼ばれていた) ことを確認した。おそらく、尾端の鋏が陰茎を切り取るという意味でこの「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」という名前が当てられたのであると思うが、「陰茎」という言葉に対して、幼児言葉で主に泌尿器としての陰茎の意味合いが強いと考えられる「ちんちん」ではなく、俗語で生殖器としての陰茎の意味合いが強いと考えられる「ちんぼ」が使われていることが、何よりもこのハサミムシの俗称の下品さと言葉から想像される痛々しさを醸し出している。そして、このような陰茎を切り取られることを連想させるような環境は、おそらく陰茎が無防備な状態になりうる便所 (あるいは排尿・排便にまつわる場所) であり、ハサミムシが便所に関連してよく観察される昆虫であったことを意味するのかもしれない。ただし、ハサミムシの形態が陰茎のように細長いことから、「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」と呼ばれるようになった可能性もあるように思われ、その場合には別の説明もまた検討する必要性が

あるだろう。いずれにせよ、このような名前がハサミムシにあてられているところをみると、人々がこの昆虫に対してどちらかというとネガティブな印象をもっていたのかもしれないが、そのネガティブな感情はこの昆虫に対してどこかストレートに向けられたものではなく、むしろゆがんだ愛が投影されているようにも思える。なお本報告では、このハサミムシを指す「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」という言葉 (すなわち「ちんぼ系」方言) が、少なくとも関西では使われている (あるいは使われていた) 方言 (あるいは俗称) の類であるということについてのみ言及しただけであるので、この方言をめぐる課題はまだ多く残されている。たとえば、このハサミムシを指す「ちんぼ系」方言がどれくらい前にどのような由来で生まれた言葉なのか、いつ頃流行した言葉で現在もなお関西地域において使われているか、この方言が関西あるいは日本のどのくらいの範囲で使われているのか (あるいは、関西固有の方言なのかどうか) などについては明らかではないので、積極的に情報を収集する必要があると思われる。加えて、「ちんぼ系」方言以外のハサミムシを示す地域言葉についても調べる必要があり、今後はこれらとの対比も行う必要があると思われる。しかしながら、「ちんぼばさみ」や「ちんぼきり」など「ちんぼ系」方言については、この下品な名称ゆえに表立って積極的に情報提供されることも少ないと予想され、調査は難航するかもしれず、情報を収集するには工夫が必要であろう。

なお、この「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」という「ちんぼ系」の名称は、実は他の昆虫の方言にも存在する。タガメを意味する言葉は、三重県松阪市や山口県宇部市では「ちんこばさみ」、広島県山県郡では「ちんちんばさみ」、京都府舞鶴市や岡山県浅口郡では「ちんぼきり」、宮城県名取市、滋賀県彦根市、兵庫県赤穂郡では「ちんぼばさみ」であるという (斎藤, 1996)。これら方言に対して斎藤 (1996) は、タガメが人の陰茎をはさむという意味でこの「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」という名前が当てられたのであると解釈している。このタガメの実例を考えると、タガメは水生生物であるのにもかかわらずこのような名前があてられており、関西におけるハサミムシの俗称の由来の説明として便所が関連しているという仮説はなりたないのかもしれない。ただし、タガメにおいては、陰茎に限らず、その他の部位や生物がはさまれる対象になっていることが確認されており、その点に留意が必要である。また、タガメに関する限りでは、その「ちんぼ系」方言の分布は局所的でありながらも、きわめて広範囲におよぶことを考えると、昆虫の俗称に対して「ちんぼ」などのように下品な言葉を用いること自体は、関西文化圏に限ったことではないようであり、ハサミムシを指す「ちんぼ系」方言もまた、関西以

外の地域でも使われている俗称なのかもしれない。

ちなみに、このように下品あるいは不名誉な名称が当てられるケースは昆虫に限ったことではないようで、たとえばミズウオという魚を「げんげ」と呼ぶ地域があるようであるが、これは「下の下」という意味である。また、ギチベラという魚は、沖縄本島では「タンメータクーヤー」と呼び、「じいさんの睾丸を食べるやつ」という意味なのだそうである。

それにしても、私は「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」という言葉がいつか「絶滅」してしまうのではないかと懸念を抱いている。ユネスコによれば、世界の言語多様性が失われつつあり、現在では世界の2500言語が消滅の危機にあり、日本に存在する多様な地域言語(方言)の中では8言語が危機言語に該当するという(佐々木, 2011)。関西弁などその他の方言についていえば、世代間の言語の継承、話者数、全人口に占める話者の割合、地域共同体の構成員が自分自身の言語に対してとっている態度などの点から、(それに加え、関西弁などの場合はテレビなどのマスメディアなどでも頻出することから)、概ね危機言語からはほど遠い存在であるものもまだ多いと思われるが、その中で使われる言葉に限って言えば、消失あるいは標準語に置き換わりつつあるものも多いようにも思われる。たとえば、関西弁では「あかん」や「ええわ」など生活に密着して使用頻度が高い言葉であれば、地域言語の言葉として保存されていくものも多いと思われるが、普通の生活でお目にかからなくなった昆虫の名称は、多くの場合現在の人々の生活にほとんど直結しておらず、言葉の使用頻度は減少している傾向にあるものと考えられる。たとえば、「兵隊虫」はツマグロハサミムシの大阪市周辺での俗称であるが、近年ツマグロカミキリモドキ自体が市内周辺であまり見られなくなったようであり(初宿, 2000)、「兵隊虫」という言葉自体が使われることも少なくなっていると考えられる。本報告文で紹介した「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」という言葉もまた、現代の人々がハサミムシと出会うことが多くはないと思われる中で、その名前の下品さも加わって、話題にのぼる機会は少ないのではないかとと思われる。加えて、ハサミムシに限らず昆虫の名称については、マスメディアの発達や社会のグローバリズムの進行による標準語の浸透、および理科・自然科学教育・啓発の観点から標準和名の普及が進行していると思われ、方言から標準和名への置き換わりが進行している可能性もある。結果として、「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」といったような言葉は世代間での言語の継承がおこなわれにくいと考えられ、言葉としては「絶滅の一途をたどっている」のかもしれない。方言における言葉は、地域の文化的な背景を反映しており、結果として地域の「文化資源」の基本要素であると考えられることから、以後は今回紹

介したハサミムシの方言である「ちんぼばさみ」「ちんぼきり」にかぎらず、各地域における様々な昆虫の方言を記録し保全していくことが望ましいと考えられる。また、そのような言葉を保全するためには言葉を使う機会が必要であり、そのためにも言葉が指し示す昆虫そのものが気軽に観察できるような環境を保全していく必要があるだろう。

末筆ながら、中峰空博士(三田市有馬富士自然学習センター)には、拙者報告文原稿素案を御一読くださり、また貴重なコメントをいただいた。厚くお礼申し上げます。また、ハサミムシなどの方言について貴重な情報をご教示いただいた方々に対しても、感謝の意を表したい。

文 献

- Berenbaum, M. R., 1995. Bugs in the Systems. 222 pp. Addison-Wesley Publishing Company, USA.
- Berenbaum, M. R., 2007. Lend me your earwigs. *American Entomologist*, 53: 196-197.
- Hogue, C. L., 1987. Cultural entomology. *Annual Review of Entomology*, 2: 181-199.
- 加納康嗣, 1993. 鍬形虫考—げんじの方言をさぐる. 谷川 健一(編), 動植物のフォークロア II(日本民俗文化資料集成第12巻). pp. 325-339, 三一書房, 東京.
- Klein, B. A., 2012. The curious connection between insects and dreams. *Insects*, 3: 1-17.
- 小西正泰, 2003. “文化昆虫学序説”. 三橋 淳(編), 昆虫学大事典. pp. 1103-1104, 朝倉書店, 東京.
- 小西正泰, 2007. 虫と人と本と. 519 pp., 創森社, 大阪.
- Meyer-Rochow, V. B., K. Nonaka & S. Bouldidam, 2008. More feared than revered: Insects and their impact on human societies (with some specific data on the importance of entomophagy in a Laotian setting). *Entomologie heute*, 20: 3-25.
- 三橋 淳, 2000. 文化昆虫学とは. 遺伝, 54(2): 14-15.
- 斉藤慎一郎, 1993. クワガタムシの方言の謎. 谷川 健一(編), 動植物のフォークロア II(日本民俗文化資料集成第12巻). pp. 343-423, 三一書房, 東京.
- 斉藤慎一郎, 1996. 虫と遊ぶ—虫の方言誌—. 294 pp., 大修館書店, 東京.
- 佐々木冠, 2011. 日本の言語状況. 呉人恵 健一(編), 日本の危機言語 言語・方言の多様性と独自性. pp. 3-11, 北海道大学出版会, 北海道.
- 初宿成彦, 2000. なにわっ子の危険な虫あそび「兵隊虫」勝負. *Nature Study*, 46: 3-6.
- 高田兼太, 2010. 文化甲虫学: 甲虫の文化昆虫学概説. 甲虫ニュース 170: 13-18.
- 高田兼太, 2013. 文化昆虫学のススメ. *Nature Study*, 59: 14-15.